

地域に根ざした大学のあり方

生涯学習や演習における実践を中心として

磯部 作

日本福祉大学・社会福祉学部



はじめに

大学には、小・中・高校などのような「学区」はなく、地域に根ざしていないように思われる。また、現在推進されている国の教育政策においては、「トップ三十」大学に重点を置くようとしており、いわゆる「地方」の大学の整理統合や淘汰を進めようとするなど、地域軽視をより推進しようとしている。これは、戦後の日本において、人口や産業、情報などをいわゆる太平洋ベルト地帯、とりわけ東京に集中させ、各地で過疎・過密問題などの地域問題、さらには地域破壊を発生させてきたこれまでの「地域開発」政

策を、教育の分野においてより推進しようとするものである。

もちろん、現代のようなグローバル化した社会では、大学において世界的な研究課題を研究し、成果をあげることが重要である。しかし、その世界もそれぞれの地域から形成されており、大学もまたそれぞれの地域に立地している。地球規模の環境問題にまで拡大した現在の環境問題にしても、地球温暖化や酸性雨の主要な発生源が先進工業国の工業地帯や自動車交通、大都市などにあるように、発生源は地域にあり、具体的な影響も地域によって異なっているのである。このため、現在、大学においては地域について科

学的に研究し、住民とともに教育や「地域づくり」を行うことが重要である。

この小論では、地域に根ざした大学のあり方について、日本福祉大学において行った地域についての研究や生涯学習、演習などにおける実践を事例としてまとめ、ことによつて具体的に考察する。この雑誌が『大学と教育』であるため、特に生涯学習や演習などにおける実践を中心としてまとめる。

地域に根ざした大学

世界はそれぞれの地域から構成されており、人々は日常的にはそれぞれの地域に住居し生活している。そして各地域は、地域固有の環境や歴史、さらに社会の不均等発展や、



いそべ・つくる ●一九四九年、岡山県生まれ ●主な著書・論文に『転換期の地域づくり』（共著 ナカニシヤ出版 一九九九年）、「漁業考現学21世紀への発信」（共著 農林統計協会、一九九八年）「倉敷市水島の現状と地域再生

の課題」【『環境と公害』Vol.28.No.3 若波書店、一九九九年】

地域における住民の営みなどにより形成された地域の特色である「地域性」をもっている。一方、現代のグローバル化した社会の中では、地域は、他の地域や世界との多くの共通性ももっている。とりわけ現代の資本主義社会においては、地域は不均等発展しており、地域格差が拡大し、様々な地域問題が先鋭化してきている。高度経済成長期以後推進されてきた五次にわたる「全国総合開発計画」などによる画一的な大企業中心の開発政策が、全国的に地域を破壊し、公害環境問題や過疎・過密問題などの地域問題を発生させているのである。過疎問題などが深刻ないわゆる「地方」においてはもちろん、大都市においても、過密問題や公害問題などの問題が深刻化しており、それらの解決が焦点の課題となっている。このような状況のなかで、現在、地域の再生や創造、さらに地域からの発進をめざして、科学的で理論的な研究と実践が求められてきており、全国各地で、「まちづくり」や「むらおこし」などの「地域づくり」の取り組みが進められている。

このため、地域に根ざした大学にとっては、第一に、「地方」、大都市を問わず、地域について、その歴史や文化、産業などを具体的に、しかも全体の中に位置づけて研究すること、とりわけ地域問題などについて科学的に研究するこ

とが重要である。しかも、地域は総合的であるため、地域についての研究は、研究者が専門性を生かして行うとともに、大学として研究所などにおいて組織的に行うこと、また地域の住民とも協力して行うことが重要である。そうすることによって、より地域の発展に役立つ研究成果が得られるのである。

第二に、以上のような大学における研究成果を、地域に還元することが重要である。一般的な研究成果とともに、とりわけ、大学の立地する地域について研究したことを地域で活かし、地域問題などを解決し、地域住民とともにより良い地域を目指す「地域づくり」に役立てていくことが重要である。大学も立地する地域の構成員であるため、研究者が個人的に「地域づくり」に参加するとともに、大学として組織的に「地域づくり」に参加することが重要であり、さらに、地域住民との共同した取り組みを行うことが求められるのである。

第三に、地域は学ぶべき多くの歴史や現実の事実を有しており、学生にとっての多くの学習課題があるため、地域研究の成果を教育に取り入れていくことが重要である。それらも教師が講義などで地域についての研究成果を教えるだけでなく、学生が演習やサークルなどにおいて、主体的に

地域について具体的に学んでいくことが重要である。また、学生は四年間は大学の立地する地域に住んだり通ったりしているため、学生が地域において、地域の歴史や現実などについて、住民から多くのことを学ぶとともに、学生も地域の構成員として、主体的に「地域づくり」に参加することが重要である。

地域に根ざした研究

日本福祉大学は、一九八三年に名古屋市内から知多半島南部の愛知県知多郡美浜町にキャンパスを移転しており、大学の立地する知多半島を研究するため、知多半島総合研究所を一九八八年に設置している。知多半島総合研究所の設立目的は、「古代から栄え、日本の近代への歩みのなかで着実な発展をとげた知多半島全体の歴史・文化・産業・生活などを総合的に調査・分析・研究し、その特殊性や、発展の経過を明らかにし、同時に半島の将来展望を研究すること」で、研究所には歴史・民俗部と地域・産業部があり、その調査・研究成果は、一九八九年創刊の『知多半島の歴史と現在』（校倉書房刊）や、『知多半島が見えてくる本』（一九九八年）などにまとめられている。そして、このような知多半島総合研究所の研究成果は、地域などが

ら高い評価を受けてきている。地域・産業部では「地域と大学の在り方について研究をおこなう」ことも研究課題としている。

知多半島には、伊勢湾などの漁業や農業をはじめ、工業や観光などの多様な産業がある。またそれらに基づく多様な暮らしと、教育や福祉などにかかわる活動が行われている。さらに東海市などにおける大気汚染による公害問題や、伊勢湾の埋立問題などの地域問題も抱えている。このため、知多半島は研究対象として非常に興味深い地域である。

私は地域を研究対象とする人文地理学が専門で、沿岸漁業や沿岸部の開発と環境問題などについて、地域での具体的な地域調査に基づいた研究や、岡山県倉敷市水島臨海工業地帯の公害問題や瀬戸大橋の環境問題などにおいて、住民参加の「地域づくり」などを具体的にやってきた。日本福祉大学に赴任して六年目であるが、知多半島地域においても、沿岸漁業と観光との課題や漁村での体験学習、海岸などの調査研究を、住民や行政の協力も得て、文部省の科学研究費や大学の課題研究費も利用しながら行っている。不十分な研究ではあるが、これまでに、知多半島西岸にある常滑市鬼崎のフィッシュャリーナについて研究し、「観光レクリエーションと漁業―鬼崎フィッシュャリーナを事例と

して―」を知多半島総合研究所の『知多半島の歴史と現在』九号（一九九八年）にまとめている。また、鬼崎フィッシュャリーナと知多半島南端の三河湾に浮かぶ南知多町の日間賀島、篠島の体験漁業などについては、『海のツーリズム』と漁業―『海のツーリズム』に対する漁協と漁業者の対応と取り組み―』として一九九九年の地域漁業学会のシンポジウムで報告し、『地域漁業研究』第四〇巻第三号（二〇〇〇年）にまとめている。さらに知多半島総合研究所の所員としては、「知多半島の海岸」について、経済学部の森靖雄教授と、常滑市でマリンセンターと海浜研究室を営む鯉江正雄氏とともに、『知多半島が見えてくる本』にまとめている。私も監修をした農林水産省・東海農政局半田統計情報出張所編集の『島はもうひとつの学校』（一九九九年）は、行政と漁協、観光協会、住民、研究者などが協力してまとめたもので、日間賀島と篠島における体験学習の取り組みなどを紹介している。この体験学習は、島内外の子ども達をはじめとした人々が、漁業体験などを通して島の生活や漁業などについて学ぶもので、講師は島の漁業や民宿、観光業などを営む方々であり、地域住民主体の生涯学習といえるものである。

地域に根ざした生涯学習の取り組み

— 講座「美浜学」を中心として —

日本福祉大学

生涯学習センターの 取り組みの概要

文部省は一九八八年に生涯学習局を開設しており、大学においても、十八歳人口の減少などが続く中で、また積極的に地域に開かれた大学を目指して、近年、生涯学習が盛んに行われるようになってきた。日本福祉大学では一九九五年に生涯学習センターを開設している。その目的は「開かれた大学づくりの伝統のつとめ、生涯学習によるまちづくりという現代社会の要請に応え、大学が地域に貢献し、地域とともに学びあうコミュニケーションづくり」である。生涯学習は、学習による自己啓発とともに、学習の成果を快適な環境改善や暮らしやすい「地域づくり」のために活かすことが重要である。

日本福祉大学生涯学習センターの主な活動領域は、「まちづくりへの参加と支援」、「生涯学習推進のためのネットワークづくり」、「講座開講」、「研究開発」である。コンピュータや外国語、古文書講読などの講座とともに、大学が立地している知多半島に関する「知多半島の自然」や「知多半島の技術と道具」、「知多半島をめぐる文化史」、「土と

木—知多半島の暮らしのルーツを探る—」などの講座や、生涯学習で学んだ英語の知識を活かした「知多半島を英語でガイドしよう」、市民の立場から「まちづくり」に関わり、「まち」を観る「半田らしさ再発見ワークショップ」や「いっばい、いっばい愛していますか、みんなでつくる子育て散歩道」などの半田市との共催講座なども設けている。伊勢湾の「海のゴミ問題」についても講座を行い、鬼崎漁協と篠島漁協の役員の方から話をいただいた。また、毎年十月に日本福祉大学生涯学習センターのある半田キャンパスで開催する「生涯学習フェスティバル」には、生涯学習の受講生をはじめ、多くの地域の方々が参加して盛大に行われている。

知多半島南部の知多郡美浜町の日本福祉大学美浜キャンパスにある生涯学習センター美浜カレッジでは、コンピュータや外国語などの講座とともに、一九九九年度からは美浜町との連携講座を行っている。この連携講座は、日本福祉大学の生涯学習センターが協力して、一九九八年度に策定された『美浜町生涯学習基本構想』の基本的な施策の一つであり、「美浜町の特徴を活かしながら、実体験を通じて自然・社会・文化とふれあう学習プログラムを開発し、町民が『まちを再発見する』事業をすすめる」ために

実施してきた事業である。具体的には、「水辺の自然観察」などを、美浜町と、美浜町にあり水族館などのある南知多ビーチランドと連携して実施している。そしてこの連携講座の主要な講座として、二〇〇〇年度から実施しているのが講座「美浜学」である。

講座「美浜学」の 講座「美浜学」は、一九九九年に生涯学習センター美浜カレッジの仕事を担当するようになった私が企画監

修し、町の教育委員会や大学の教職員とともに実施している。

美浜町は人口約二万五千人の町であるが、東西を伊勢湾と三河湾で囲まれている知多半島南部に位置しており、山や丘陵、平野、海岸、海など多様な自然環境があり、「美浜」の町名の通り、その美しい海岸地域は三河湾国定公園に指定されている。歴史的にも、古代の遺跡をはじめ、中世の源氏や、近世の海運関連の史料や建造物など多くの史蹟がある。産業では、酪農やミカン栽培などの農業や、海苔養殖業をはじめとする漁業、食品加工業などの工業、それに商業や観光業などがあり、約四十キロメートル離れた名古屋市への通勤圏ともなっている。また、住民による「竹炭づくり」などの「地域づくり」の取り組みも行われている。

る。ただ、美浜町の北、常滑市沖の伊勢湾で進行している中部国際空港建設による漁業への影響などの地域問題も抱えている。このため、美浜町には、学ぶべき多くの課題が存在しているのである。

そこで、美浜町について、大学の研究者の研究成果や地域の知恵などを活かしながら、地域の方々や学生とともに、地域の良さや問題について学び合うことなどができるようにと考えて企画したのが「地域学」としての講座「美浜学」である。講座「美浜学」では、大学の研究者が中心となって美浜町の地域の状況や課題について講義するとともに、現地見学や体験などを取り入れ、具体的に美浜町の地域について学習するものである。しかもそこでは、大学の研究者だけでなく、とりわけ現地見学や体験などにおいては、できるだけ地域の住民の中からも講師などをしていただけるようにしている。

講座「美浜学」のキャッチフレーズは、「学び・体験・再発見」であり、「美浜町は、いろいろな学習資源（自然・歴史・産業など）に恵まれた町です。しかしあまりに身近すぎて、意外と知らないことも多いはずです。今回いくつかの学習資源を活用して町を再発見する講座を開講します」と、町の広報誌などで参加を呼びかけた。

小・中・高校において二〇〇二年度から実施される新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」（総合学習）が導入され、地域における環境学習や体験学習などが重視されている。このため、「総合学習」などにおいて利用できる内容を用意した講座「美浜学」の開催曜日は、二〇〇〇年度と二〇〇一年度では、小・中・高校の先生方が参加しやすい第二、第四土曜日とし、私が担当している地理学や教育実習などを受講している教員志望の学生などに対しても、講座「美浜学」への参加を呼びかけていった。ちなみに、講座「美浜学」の受講料は一回につき二百円で、中学生以下は無料である。

講座「美浜学」の
実施内容

講座「美浜学」は、歴史と自然、それに産業などについて、二〇〇〇年度には四回、二〇〇一年度には、プ

レ企画を含み五回実施した。二〇〇一年度はまだ年度途中であるため、ここでは、二〇〇〇年度の実施内容を中心に概括する。

二〇〇〇年度の第一回目は、歴史について、源義朝のゆかりの寺である美浜町西南部の野間大坊（大御堂寺）で行った。そこでは、福岡猛志副学長の講演「義朝と大御堂寺―歴史の伝承と発展―」と、大御堂寺住職の水野隆圓氏に

よる「義朝公最期のお絵解き」が行われ大変好評であった。講演では、美浜町西部地域の歴史の概要とともに、義朝暗殺事件を、史料批判も含めて客観的に使用しながら、歴史学者としての研究成果をもとに講義された。また「絵解き」は、義朝の暗殺の経緯を描写した掛け図を指し示しながらなされた。その後は、野間大坊や、義朝殺害の湯殿跡などがある法山寺を見学した。

第二回目は、「美浜の産業」をテーマに行った。最初に、美浜町内にある「えびせんべい」の製造販売施設である「えびせんべいの里」において、製造工場を課長の案内で見学した。続いて、経済学部の森靖雄教授が「知多半島の産業発展と美浜町の産業」について講義された。森教授は、長年の知多地域の研究成果から準備された詳細な資料をもとに、その有利な「産業地理的条件」を説明されたあと、「産業半島」としての知多半島の歴史的な発展過程を話され、時間不足のため「愛知用水と知多半島の農・畜産業」、「観光と産業」などについては、日を改めて講義されるという状況であった。

第三回目は、「知多半島の地質・地層―師崎層・常滑層・野間層の成り立ち―」をテーマに行った。まず地質学者の諏訪兼位学長が、二〇〇〇万年前から現在までの地球の

歴史がよく残されている「知多半島の地質・地層」について、「そのあらし」を、資料とスライドを使用して講義された。その後、学長の案内でバスによる美浜町・南知多町のエクスカージョンに出かけ、最初に大学の近くで海成層である野間層群を、次に美浜町南部で湖成層である常滑層群の河和累層を、さらに南知多町で海成層である互層の師崎層群の露頭を見学し、「化石探し」をして、貝などの化石を採集した。最後に南知多町の海岸で津波岩を見学した。

第四回目は、「海岸の自然と産業―海苔養殖を中心に―」というテーマで行った。最初に、美浜町西部の野間漁協で大崎正明組合長が、「野間漁協の海苔養殖」について、建設中の中部国際空港の影響も含めて講義された。次に、海苔養殖場や新空港建設の現場を、組合長などの説明を聞きながら海岸から見学し、海岸近くの海苔養殖漁家では、機械化された海苔の加工過程を見学した。また、野間漁協の広場では、「手すき」による「海苔すき」を組合長の指導で体験した。最後に、私が「海苔養殖業の状況と美浜の海岸」と題して、海苔養殖業の歴史や生産状況、埋立による漁場の減少などについて講義した。

講座「美浜学」の二〇〇〇年度の四回にわたる講座「美浜学」には、美浜町を中心に知多半島地域から、定員を上回る延べ

百四十九名の参加者があり、講座の内容は新聞やテレビでも放送され、参加者のアンケートをみても大変好評で、大きな成果をあげたと言える。

四回目の講座に参加した学生の一人は、アンケートで「私は奥田に下宿してもうすぐ三年になりますが、近くで海苔養殖が行われていると知っていても、現状は知りませんでした。今回参加して、組合長さんの生の声も聞け、加工の過程も見ることができよかったです」と書いている。参加された小学校の先生は「学校の教材の資料としたい」と書かれていた。学長などとも、この講座「美浜学」の内容を、とりわけ学校の先生などに広めたいと考えていただけにありがたかった。また、四回とも参加された参加者の方から、「二百円の受講料は安いので、千円はとってほしい」とも言われた。

このように成果をあげることができた要因は、第一に、講座「美浜学」のキャッチフレーズである「学び・体験・再発見」のうちの「学び」のテーマが、「歴史」をはじめ、地域の方々の要求に合ったことである。それは、講座「美

浜学」が美浜町との連携講座のため、最初から美浜町社会教育課の方々と共同して準備をすることができ、住民の要求を十分に取り入れることができたことによるのである。

第二の要因は、「化石探し」や「海苔すき」など、参加者が主体的に「体験」したり、現場を「見学」することをすべての講座で取り入れたことである。やはり「体験」や「見学」することは「学び」をより深くすることに繋がり、若い学生だけでなく、多くの参加者に好評であった。そしてこの「体験」や「見学」には、「野間大坊」の住職や「えびせんべいの里」の課長、野間漁協の組合長など、地域の専門家の方々の協力と指導、すなわち「地域の知恵」が得られたことで実現したものである。

さらに第三の要因としては、具体的な地域の事実を、地域に根ざして研究を進めていた大学の専門的な研究者の講義によって科学的に把握することができ、地域の「再発見」に繋がったことがあげられる。大学の研究者が、地域において、専門的な研究者集団として、地域の自然や歴史、それに実態などを、全体的に位置づけながら科学的に研究していくこと、そして、その研究成果を地域に還元していくことがかなりできたといえる。

講座「美浜学」の問題点としては、「体験」などを取り

入れたため、講座の参加人数を制限せざるを得なく、申込者に迷惑をかけたこと、まだ講座の成果を「地域づくり」に反映するまでに到っていないことなどがあげられるが、講座「美浜学」によって、地域に根ざす大学のあり方を少しでも示すことができたのではないかと考えている。

地域に根ざした教育

— 地域における体験学習や調査活動を取り入れた授業 —

地域学習の意義

私は、専門の人文地理学や地誌の講義だけでなく、演習でも地域を取り上げている。特に演習では、学生による地域における体験学習や調査活動を実施することを重視している。地域を学習や研究の対象として取り上げ、学び、研究することは、地域を科学的に把握し、より良い暮らしを目指して地域で住民として主体的に生きていくうえでも、世界を科学的に認識するうえでも重要だからである。グローバル化した社会を科学的に認識するためには、世界情勢を含めて多くの知識や分析方法が必要なことは事実である。ただ、現実の地域をしつかり直視することなしには、それはなし得ないであろう。

日本福祉大学では、学生の出身地は全国に及んでおり、

海外からの留学生もいる。ただ近年、愛知県をはじめとする東海地区出身の学生が多くなってきており、大部分の学生が知多半島などに居住している。先述したように、知多半島は、学習・研究対象として非常に興味深い地域であるが、知多半島、とりわけ美浜キャンパスの立地する美浜町は、「田舎で、何もない」と感じている学生も多い。そこで、地域において具体的な体験学習や調査活動などを行い、「地域で学び」、「地域に学び」、「地域を学ぶ」ことによって、地域の状況や問題などを具体的に学ぶことが重要視されているのである。地域における体験学習や調査活動は、私教職課程も担当しているため、社会科学教育をはじめ、「総合的な学習の時間」（総合学習）などにも活用できるようにと考えて取り入れている。

演習における

地域の授業実践

私が演習で知多半島地域の授業実践を始めたのは、知多半島地域での調査研究がある程度進んだ日本福祉大学赴任三年目の一九九八年度からである。大学一、二年生の演習においては、「地域で」「地域に学ぶ」ことを、三、四年生の専門演習では、さらに「地域を学ぶ」、すなわち「地域のあり方」などを考察することを重視している。そして、美浜キャンパスある美浜町の奥田地区や、私が調査や「地

域づくり」などに関わっていて、漁業と観光が中心で体験漁業などを取り入れた「地域づくり」も行われている南知多町の日間賀島や篠島、知多半島の海岸などをフィールドとしている。奥田地区をフィールドとしているのは、至近距離でゼミの時間中にも見学などが実施しやすいうえ、学生にとつて最も身近な地域を科学的に認識することが重要だと考えたからである。地域の選定やテーマ設定などはゼミ生の希望によって行っている。

一九九八年度の一年生の教養演習では、奥田海岸において、野間漁協が実施した海岸ゴミの清掃に参加した。その後、砂留（さろ）と呼ばれる砂留めの突堤の上で、二本のゴミ問題のレポート発表を行い、ゴミ問題について議論した。また、野間漁協で、組合長や参事の方から、地域漁業の中心である海苔養殖業の実態や、常滑沖の好漁場を埋め立てて建設される中部国際空港が、伊勢湾の漁業、とりわけ知多半島西岸の漁業に多大の影響を与える問題についてお話を伺った。学生は、海岸での清掃体験活動を行うことで、地域の方々と交流できるとともに、伊勢湾の環境問題を肌で感じる事ができた。また漁業の状況や地域の問題である中部国際空港の問題について、関係者から直接話を聞き、多くの質問をすることができたことは貴重な体験と



なった。

一九九八年度の三年生の専門演習では、篠島を、ゼミ生がアルバイト先で同僚となった島のシラス漁を営む漁業者の案内によって見学した。篠島の漁港や、漁網の手入れの様子、篠島にある海水浴場などの観光業の状況、伊勢神宮とも関係のある神社や史跡、愛知用水の貯水槽や島の学校の状況などを見学し、地域のあり方について学んだ。ホテルでは新鮮な魚の料理を食べ、魚嫌いであった学生も魚の本物の美味しさに感嘆した。後日、この漁業者と篠島観光協会の会長は大学のゼミに参加され、近年観光客が減少している観光の状況や、シラス漁の状況などについて具体的な統計資料をもとに話し合うとともに、今後の篠島の「島づくり」のあり方について、ゼミ生が若者の立場からの意見を出し合い議論した。地域の状況やあり方について、展望をも含めて、地域の方と話し合うことができたことは有益であった。

二〇〇〇年度の二年生の基礎演習では、「地域づくり」について学ぶため日間賀島に行った。そこでは、日間賀島アイランドプロジェクト（HIP）の漁業者の方が体験漁業として行っている地曳網を体験した。また、HIPの方の案内によって日間賀島の中を徒歩で見学し、ホテルの厨

房では、地曳網で獲った魚を刺身などにする調理体験も専門の調理人の指導のもとで行った。また、日間賀島観光協会会長の話を伺い、H I Pの方々と日間賀島の状況や「島づくり」について膝を交えて話し合った。漁業に従事する若者も多く、高齢者を含めた島民が助け合って暮らしている島の状況を概観し、「島づくり」について若者らしい意見を出しあった。その後、全員で感想や意見をまとめ、観光協会の会長に送付したところ、意見を「島づくり」の観点から表にまとめ直していただいたため、再度ゼミで話し合い学び合った。テキストだけでなく、地域で体験を交えて話し合ったことは大変有意義であった。

二〇〇一年度の二年生の総合演習では、海の環境問題を実際に体験し理解するため、奥田海岸において海岸ゴミの清掃作業を行った。この取り組みは、清掃を行うだけでなく、ゴミの種類やその数量を記録して美浜町役場の環境保全課に連絡しており、『中日新聞』にも紹介された。また、中部国際空港の埋立て工事の状況について学ぶため、空港建設現場を、野間漁協の空港監視船で海から見学した。空港周辺海域では、学生が手作りした透明度板を使い透明度の調査も行った。空港建設現場からの流されたワイヤーや石が網にかかって被害の出ている貝けた網という小型底曳

網などの操業状況も見学した。中部国際空港建設現場の見学は、二〇〇〇年度の二年生の演習でも計画していたが時間がなかったため、二〇〇一年度を実施している。また、二〇〇一年度の二年生の総合演習では、黒い「鎧囲い」のある奥田の街並みなどを徒歩で見学した。さらに知多半島の東の三河湾に浮かぶ一色町の佐久島で、過疎化の進む島の「島おこし」について役場の職員や「島おこし」のリーダーとも話し合い、島民や観光客に「島おこし」についてのアンケート調査を行っている。

二〇〇一年度の三年生の専門演習では、日頃利用している駅のバリアフリーマップを作成するための調査とともに、高齢者や障害者を含めて誰もが海に親しめる状況を目指す。美浜町から南知多町にかけての知多半島の西海岸について、砂浜を中心にバリアフリー調査をしている。奥田海岸では、海岸のアクセス状況や、潮干狩りなどの利用状況などについて、海岸の観察や漁業者からの聞き取り調査を行い、南知多町の内海海岸では、海水浴の利用状況と観光協会などへの聞き取り調査を行っている。また、美浜町の小野浦海岸や南知多町の山海海岸などにおいても、海岸のアクセス状況や護岸の状況などについて現地調査をしており、海岸にスロープがほとんどないことなど、海岸の

バリアフリーについてはまだ多くの問題点があることが明らかになった。現在、これらの海岸のバリアフリーマップを作成している。ゼミでは、美浜町の助役や南知多町の職員なども話をしており、自治体なども協力しながら、海水浴場などのバリアフリー化推進に役立てていきたいと考えている。

二〇〇一年度の四年生の専門演習では、前年度から取り組んでいる現代の子どもの遊び場を中心にした遊び調査を、地元の奥田小学校において実施している。奥田小学校の学区を歩いて子どもたちの遊びの様子を見たり、放課後の校庭で子どもといっしょに遊んだりすることによって、奥田小学校の子どもの遊びの概要を把握するとともに、奥田小学校の先生方の協力を得て、全校児童に対して遊びの内容や遊び場など、遊びの実態についてのアンケートを実施した。そして、校区内に山や川、それに海まである自然環境が豊かな奥田においても、自然の中で遊ぶ子どもが少ないことなどの遊びの実態が明らかになった。調査結果は、ゼミにおいて学生の子どもの時代や、ゼミ生の一人が取り組んでいるフィリピンの子どもの遊びの状況なども比較しながら討論するとともに、そのまとめを奥田小学校に報告している。

二〇〇一年度の総合演習を履修した学生は、レポートで「一年間ゼミを通して、様々な面において自分の視野を広げることができたと思います。大学のこと、奥田のこと、大学近くで起きている空港問題、そして我々を取り巻く様々な環境問題。すべての事柄が今までの自分の中では、どこか遠い世界での出来事のように思えて、何一つ興味関心を持って調べてみようと思う気が起こせませんでした。しかし実際足を運び目にするにより今までそれほど興味を持っていなかったこういった事柄に少しずつ興味を持ち始め、最近ではこういったニュースを耳にするとうれしくなり興味を持って耳を傾けるようになりました。」

「この夏佐久島を訪れたことにより、ただ知らない土地を知ることができたという喜びだけでなく、自分の住む地域を見つめなおし、その中で地域づくりの重要性、特に地域に根付いた、地域住民を主体とした地域づくりの重要性を学ぶことが出来ました。」などと感想を書いている。

講義などにおける 地域の授業実践

知多半島を取り上げた授業は、人文地理学や地誌などの地理学の講義においても実施している。人文地理学の講義では、日間賀島や篠島の「地域づくり」などについて取り上げ、地誌の講義では、知多半島全体の地誌などを

取り上げている。受講生に課している「地域」をテーマとしたレポートにおいては、できるだけ具体的な調査などを取り入れたレポートの作成を求めており、写真なども入れたよく調査したレポートを提出してくる学生も多い。そして、これらのレポートを講義において学生に発表してもらっており、学生同士学び合い、好評である。とはいっても、百人を超える講義においては、演習のように体験学習や調査活動を取り入れて実践することは容易ではない。希望者による日間賀島などでの聞き取り調査なども行ったが、少人数の参加しかできない。また教育実習の事前指導の講義などにおいても、「総合的な学習の時間」（総合学習）などのために体験学習や調査活動などを取り入れることが重要であるが、これも百人を超える人数と時間の制約の中では困難であった。そこで、知多半島における体験学習などについては、講座「美浜学」に参加するように学生に呼びかけており、かなりの学生が参加している。

これらの授業で取り上げた知多半島という地域は、本学の学生にとって身近であり日常である。しかし、その地域について、多くの学生は、地域を取り上げた授業後の感想では「余りにも知らなかった」などと述懐しており、その後「地域」に興味を持って地域調査に取り組み始める学生

もいる。また、人文地理学などの講義を受講した学生のうち、日間賀島などに行く学生も多い。

おわりに

以上、「地域に根ざした大学のあり方」について、生涯学習や演習における実践を中心としてまとめた。

日本福祉大学全体では、福祉分野における地域の研究や福祉計画の作成など多くの成果や実践があり、知多半島総合研究所でも、歴史・民俗部における古文書研究など多くの成果がある。日本福祉大学の生涯学習センターでは、副総長をはじめとして、知多半島の市町の生涯学習基本計画作成に関わっている。私も、美浜町、南知多町などの生涯学習推進協議会委員をしており、知多総合研究所の関係で、美浜町の富具崎及び野間海岸整備基本計画検討委員会の委員長もしている。また、先述した『島はもうひとつの学校』の作成に関わったことから、知多地区の漁協組合長などが参加する会議で三年連続講演をしたり、島の「地域づくり」や中部国際空港の環境問題について、観光協会や漁業者の方などから相談を受けたりしている。さらに漁業の体験学習をする小学校を日間賀島に紹介しており、教職希望などのゼミ生がサポーターとしてこの体験学習を援助してい

る。

しかし、この小論は、これらにはほとんど触れることができず、自分の関わった生涯学習と演習の実践を中心にとめたにすぎない。この小論で取り上げた地域研究や授業実践は不十分な実践であるうえ未整理な部分も多く、「地域に根ざした大学のあり方」についてまだ十分な考察ができていない。ただ、地域自体がそれぞれ独自の「地域性」を持っている以上、「地域に根ざした大学のあり方」も、それぞれの地域で特色を持って行われるべきである。このため、あえてここに私の拙い実践を具体的にまとめたのである。

今後とも、地域における体験学習や調査活動を取り入れた授業実践などを地道に重ねていきたいと考えている。忌憚のない御批判や御指導を頂ければ幸いであり、そうすることが、「地域に根ざした大学のあり方」をより深めていくものと考えられるのである。

(追記) この小論に記した生涯学習と授業の取り組みは、拙稿『地域学』としての講座『美浜学』の取り組み(『日本福祉大学生涯学習センター年報』第三号 日本福祉大学生涯学習センター 二〇〇一年 九(一二頁)と、拙稿『地

域における体験学習や調査活動を取り入れた授業―知多半島における演習での実践を中心として―(『私の授業実践―大学の授業改善と創造―』日本福祉大学社会福祉学部 二〇〇一年 一六(二〇頁) にその後の状況もふまえて加筆等したものである。

